〔講演録〕

唐代に元稹・白居易の詩は木版印刷されたのか

―「模勒」の語について―

辛　德　勇
（程　正　訳）

一、「模勒」を木版印刷とする説の由来

現在、中国の書籍の木版印刷史という研究領域においては、唐代の人々が元稹・白居易の詩を「模勒」したという記述を、中国で木版印刷が行われた最古の文献記録と見なすことが、大多数の学者によって認められている。

この根拠とされる記述は、元稹撰『白氏長慶集序』にある。すなわち、

（白居易の詩が）繕寫・模勒して市井に衒賣せられ、或いは之れを持して以て酒茗を交わす者は、處處、皆な是なるに至る。〔揚、越（州）の間、書を作して、樂天及び予の雑詩を模勒し、市肆の中に賣ること多し。〕（至於繕寫模勒、衒賣於市井、或持之以交酒茗者、處處皆是〔揚、越間多作書模勒樂天及予雑詩、賣於市肆之中也。〕）※〔　〕は原注。

最初にこの「模勒」を木版印刷の意であると断定した学者は、清朝の趙翼（乾隆年間）である。そしてこの説は、日本の島田翰の『古文旧書考』、清末の葉徳輝の『書林清話』、民国時代の王国維の『五代両宋監本考』、『両浙古刊本考』などによって継承された。特に王国維は、「模勒」を木版印刷以外には考えられないと断定された。この「模勒」の問題につ

いては、それ以降の学者も木版印刷説を踏襲してきた。

その一方、アメリカ人の学者であるカーター（T. F. Carter）が著書『中国の印刷術　その発明と西伝』の中で、上記の『白氏長慶集序』の記述に言及せず、「模勒」を木版印刷としないペリオの主張に従った（ペリオ『中国印刷術の発端』→『ペリオ遺著』巻四）。ただ残念なことに、ペリオはそれについての詳細な論述を展開しなかった。カーターに後れて登場してきた中国人研究者の向達もこの「模勒即ち木版印刷説」には賛成しなかった。

日本の研究成果に目を転ずれば、或いは『中国の印刷術　その発明と西伝』の影響があったかもしれないが、この問題については、数多くの学者がカーターと同様に回避した形をとったようにみえる（石田幹之助『長安の春』、大内白月『支那典籍史談』、長沢規矩也『書誌学序説』、『図解和漢印刷史』など）。

誠に残念なことに、この「模勒即ち木版印刷とする説」に否定的な見方を示したペリオ、向達のいずれもが、本格的な論証をしなかった。それが故に、中国の学界に受け入れてもらえなかった。

このような状況を踏まえて、ペリオらの主張に基づき、この中国印刷史上の重大な問題についてもろもろの文献を吟味し、再検討することとしたい。

二、「模勒」の本当の語意とは

「模勒」に関するよく見られる用例として、碑文の制作過程においては、「模勒上石」という術語がある。それが故に、正しく「模勒」の意味を理解するために、まず「模勒」とは具体的に碑文の制作過程のどの行程を指しているのかを考えてみたい。

清末の葉昌熾がその著者の『語石』の中で、この「模勒」という行程についてこのように述べている。

古碑を按ずるに、凡そ書の模勒と鐫刻とは二事と為す。……蓋し古人の刻碑は、或いは丹を石に書し、或いは別に丹を書して、其の文を雙鉤して以て石に上らしむ。模勒とは即ち勾勒なり、……（※雙鉤法と呼ばれる特殊の技法）

（按古碑、凡書模勒與鐫刻為二事。……蓋古人刻碑、或書丹于石、或別書丹、而雙鉤其文以上石。模勒即勾勒、……）

また歐陽修が『集古録跋尾』の中で、「模勒」と「鐫刻」を対にして挙げている。

模勒・鐫刻に、亦た工拙有り。（模勒鐫刻、亦有工拙）

そして宋代の鄧椿が『画継』の中で、宋代の宮廷画院に六種の待詔官が設けられており、「模勒」がその一つであると記している。ここにいう「模勒」は、碑文の制作とは全く無関係であることが明らかなのである。

以上のような用例を踏まえて検討すれば、古人のいう「模勒」とは、向達のいう通り、「勾勒」のことで、絵画あるいは墨跡に対する模写のことである。

もちろん、碑文の作成にあたり、通常の場合「模勒」という行程を経てから、「鐫刻」の行程に入るが、「模勒」という言葉自体は、碑文を彫刻するような意味を持たないし、木版印刷とは何ら関係もない。

『説文解字』や後漢の劉熙の『釈名』の「勒」という漢字に対する説明によれば、

其の（馬の）頭を絡めて、之れを引く。（絡其（馬）頭而引之）（※馬の首にからませるひきづなのこと）

という。おそらく、「模勒」の「勒」の字義はこれによったものであろう。つまり輪郭を模写することである。

以上のように検討してきた結果、「模勒」の語意は、「模写」或いは「摹写」に等しいものと考えられる。かつて傅増湘は元稹の『白氏長慶集序』にあった「模勒」の箇所が、宋の蜀刻本では「模写」となっていると指摘されている。

このように、「模勒」を「模写」或いは「勾勒」に置き換えれば、唐代に元稹・白居易の詩を「模勒した」というのは、元稹・白居易の詩を「模写した」という意味になろう。すなわち、唐代の人々が意図的に元稹・白居易の筆跡を真似して書写したことになる。これは、普通の「繕写」とは明らかに区別していることからして、元稹がわざわざ「模勒」と「繕

写」を対にしてあげたと考えられる。

三、世俗社会における書籍の木版印刷技術の伝播

元稹が『白氏長慶集序』で言及した「模勒」という語が木版印刷とはまったく無関係であることを論証できたことは、木版印刷術を出現させた社会的原因や、異なる文化領域における中国早期の木版印刷技術の伝播過程をより正確に理解する一助になったと確信している。

もし早期の木版印刷物の性格を根拠にして、木版印刷術を出現させた直接的な原因を考えるならば、それは仏教、道教の宗教活動と世俗社会の科挙試験という三つの大きな需要があったからであろう。ただし、この問題についての論証は別の機会に委ねたい。

ここでは、元稹・白居易の時代には、まだかれらの詩を木版印刷物にして販売するほどの大きな社会的需要がなかったことだけを指摘しておきたい。

その一方、唐代は中国の木版印刷技術のスタートした時期でもある。印刷技術の応用範囲が出現し、次第に拡大していったのである。漸次発展していったという過程を考えなければならない。筆者の知る限りでは、唐代の木版印刷に関する最も古い紀年が推定されうる確実な証拠として、韓国慶州の仏国寺にある釈迦石塔の中から発見された『無垢浄光大陀羅尼経』が挙げられる。その刊刻年代は、武周の長安四年（新羅聖徳王三年、七〇四年）から唐の玄宗の天宝十載（新羅景徳王十年、七五一年）までの間と推定される。

従来の研究成果によれば、唐代では、仏、道の両教のほか、確かな紀年を有する伝世文献や出土した文献によって裏付けられた世俗書物の印刷物は、暦、常用の針灸、方術及び字書、韻書などであり、いずれも小学の書籍であったとされて

いる。

早期の木版印刷及びその応用範囲について、かつて向達は、中国の印刷の萌芽も、他の国と同様に、寺院に起源したのであろうとし、そして宗教から世俗への過程には、過渡的な印刷物があったと考えられ、例えば暦はおそらくそのうちの一種であろうと指摘されている。この見解に示された印刷術に関する研究の方向性は確かに正しいが、残念なことに、氏自身でさえも、この方向で「模勒」を木版印刷とする従来の説の不合理性を解明されることはなかった。

暦や日常の針灸方術などの類は、いずれも道教の陰陽、雑術に関連する書籍の延長線上に位置するものである。それに対して、字書、韻書などの小学類の書籍は、世俗文化教育における必需なものである。先行して出現した仏、道両教の印刷物の展開及びそこからのいくばくかの影響を除けば、伝統的な儒教の教育、特に科挙試験の需要は、これらを刊行させる直接的な原動力になったと思われる。

そして、小学類の印刷物に関する記載は、すべて唐の懿宗の咸通三年（八六二）以降のものであることを指摘しなければならない。これは元稹が『白氏長慶集序』を撰述してから四〇年後のことである。もし『白氏長慶集序』の「模勒」が木版印刷のことを指しているなら、書籍の性格的にも時期的にも不合理が生じるであろう。

唐末五代初めの徐夤は『自詠十韻』の中に、自分の賦が「鐫印」して販売されたことを述べている。張秀民らはこれを五代の木版印刷の事例としている。詩と賦が性質の近い文学作品であるから、これを根拠に唐代で行われた「模勒」が木版印刷であるとする人がいるかもしれない。

たしかに、元稹・白居易の詩を徐夤の賦と較べると、性質的には近いが、実際、両者には大きな相違があるのである。元稹・白居易の「元白体」と呼ばれる詩は、絶大な人気を誇っていたものの、利益には直接結びつかないことから、これらを求める者は、単なる趣好にすぎず、執拗に求めることはしていなかったはずである。それと同時に、単なる趣好であるからこそ、写本を手にとって読むという伝統的な慣習が、むしろ新しい木版印刷物を受け入れるのを拒絶さえしたと

も考えられよう。

このような類の書物の流行範囲は、おそらくある特定のグループに限定されていたのであろう。つまり、元稹・白居易の詩篇を好んだ、良質の教育を受けた人たちのグループである。おそらく元稹が『白氏長慶集序』で述べたほど広範囲ではなかろう。

白居易が元稹のために撰した墓誌では、彼の詩篇の流布ぶりについて「皆な之れを写伝す」と述べている。この言葉は、これらの詩篇の流行が書写に頼っていて、書写より効率のよい複製方法を用いなかったことを意味するものであろう。元稹の詩篇が、このようであるならば、同時に流行した白居易自身のものについても同じことがいえよう。

唐代の科挙試験が詩、賦に偏り始めたのは、玄宗の天宝末である。徳宗の貞元半ば以降になると、賦が試されることはますます盛んになっていった。

こうした状況の中で、合格しようとする受験生たちは、自ずから名士の書いた賦を手本として真似しようとしたことであろう。このことについては、白居易自身の経歴が好例となろう。彼が受験勉強の頃、時間を次のように分配した。

昼は賦を課し、夜は書を課す。間は又た詩を課す。

元稹の『白氏長慶集序』は、白氏が出世した後、彼の賦を「新進士、競い相いて京師に伝う」、「時の楷式を為す」とした。

こうした功利的需要は、好みで読誦された彼らの詩篇に対する需要をはるかに上回るものであったことは明らかである。これは、（写本を手にとって読むという）伝統的な慣習を乗り越えるに足るものである。

従って、木版印刷は世俗社会に拡大していった時に、民間の日常的工具書を除いて、まずこのようなものを手がけたはずである。

徐夤は賦の名家である。自分の賦が「鐫印」して販売されたことを記した彼の記録は、われわれに大変貴重な証拠を残

したのである。これは、まさに世俗社会における木版印刷が韻書、字書など小学類の基礎教育の書籍から、「九経」のような儒家経典へと拡大していった過程の中間に位置する一事例なのである。そして、こうした過程における各段階を一段と高めたのは、科挙試験に関連する功利的需要であろう。

このような考え方に基づいて、木版印刷の伝播過程を考察すれば、五代に徐夤の賦が「鐫印」して販売されたことは、唐代での「模勒」を木版印刷の根拠とすることができないどころか、徐夤以前の元稹・白居易の時代では、単なる趣好による木版印刷がほぼ不可能なことであることさえ立証するものといえよう。

仮に一歩譲って、「模勒」された元稹・白居易の詩篇と、「鐫印」して販売された徐夤の賦との性質的な相違を除外したとしても、この両者の間に、すでに八〇年近くの時間差がある。この期間内に、木版印刷がある程度普及したことも想像できよう。だから、いずれにしても、徐夤の記録をもって唐代の「模勒」が木版印刷である可能性を立証する証拠となりえないのである。

唐人模勒元白诗非雕版印刷说

—兼论中国早期书籍雕版印刷技术在世俗社会的传播扩散过程

辛 德 勇

【内容摘要】元稹在《白氏长庆集序》中记述说，唐人曾“模勒”他和白居易的流行诗篇，用以鬻卖，明人胡震亨和清人赵翼始将其视作有关中国书籍施行雕版印刷的最早记载；这一观点，经岛田翰、叶德辉、王国维等人阐释，现在已经得到绝大多数中国学者的认同。本文研究则指出，所谓“模勒”，应当如同向达、伯希和过去所理解的那样，实际是指勾勒，亦即影摹书写，与雕版印刷，本毫无关系。由此进一步探究，则可以发现，中国早期书籍雕版印刷技术在世俗社会的传播扩散过程中，由字书、韵书等基础教育用小学书籍，到科举试赋的范本，再到儒家经书，是一条相互连贯的递进序列；社会教育，特别是科举考试，是促使印刷术由宗教及其邻接领域向世俗社会全面传播扩散之最重要的驱动力。

【关键词】 模勒 雕版印刷 唐代